

日 時	令和5年3月15日(水)10:00~11:30
対 象	静岡市第3次総合計画 重点プロジェクト 【共生都市】自然環境の保全と適正な活用を通じた人々と自然との共生
委 員	北大路信郷 委員、源 由理子 委員、米原 あき 委員、伊藤 史紀 委員 鈴木 康平 委員、木下 聡 委員
市出席課	(主な説明課)企画課、環境創造課、緑地政策課 (陪席課)教育総務課、井川支所、中山間地振興課 (事務局)総務課

議事内容

事務局

それでは、【共生都市】自然環境の保全と適正な活用を通じた人と自然の共生について、資料の説明を各課からお願いします。

《主な説明課から 資料の説明》

事務局

説明ありがとうございました。それでは、各委員順に指名しますので、ただ今の説明及び質疑等を通じて、御意見をお願いします。

伊藤委員

3次総の取組や指標設定は、苦労されて取組んだのであろうことが伝わってきた。説明から、3次総では成果等の指標設定が難しかったという印象を受けたが、4次総ではアウトプットだけでなく、アウトカム指標をちりばめて作成されており、ロジックモデルを意識して作成されたという印象を持っている。

質問だが、今の説明だと南アルプスの自然環境の保全について、3次総ではボリュームがあったものの、4次では施策の一つという位置づけになっている。4次総における南アルプスユネスコエコパーク（以下「エコパーク」と表記）の位置づけや取組み具合を教えてください。維持していくのか、発展させていくのか。

環境創造課

エコパークについては、認知度が上がってこないことが課題としてあり、市街地からも遠く、アクセスが悪い。このような課題感から、4次総における5大重点政策にも、4つの新しい取組を加えており、4次総についても引き続き力強く推進していく予定である。

伊藤委員

承知した。指標設定については、何か参考になることが無いかと思って話を聞いていた。元々のエコパークの考え方に MAB 戦略といった行動指針のような記載があった。今後、4次総において改めて指標を考え直すのであれば、そのあたりを参考にしたらどうかと考えた。

事務局

伊藤委員ありがとうございました。続きまして、鈴木委員お願いします。

鈴木委員

主に、エコパークのことについて質問と意見をさせていただく。まず、指標についてだが、資料における指標について、エコパークに関係する3つ指標が掲載されているが、約40件の取組に対して3つの指標で管理しているのか。

環境創造課

この3つだけではない。管理運営計画は8つの指標で管理しており、代表的なものをここに載せている。

鈴木委員

承知した。まず、エコパーク全体としては、市はよくやってくれているという印象を受けている。情報発信について、HP「南プス」も良くやってくれていて、25万PVという実績を今後伸ばしていくことが指標になるかなと感じる。一方で、エコパークはユネスコの制度なので、「南プス」という名前について、世界を意識した名前に変えていくようなことを検討いただいてもいいかと感じる。

加えて、4次総は既に定まっている中ではあるが、重点政策の「オクシズの森林文化を育てるまち」において、「エコパーク」という単語は出してほしかった。エコパークの取組は静岡市が先頭に立って進めてきているので、今後も大事にしていきたい。

また、エコパークについては、関係市町村も関心が高くなっており、静岡県も計画を作成するという話を聞いている。県の計画は市の計画と重なる部分も多い。早くから取り組んできた静岡市としては、静岡県と積極的に連携して取り組んでもらえるようお願いしたい。また、エコパーク10周年も控えているので、地域が盛り上がるように頑張ってもらいたい。

最後に指標について、南アルプスを活かすという点において、農業も大事だと思う。エコパークの範囲内で統計が取れるかわからないが、農産品の出荷額、量といった部分も検討できるのではと思う。あとは温泉入場者数があるが、登山客数や漁協の遊漁権の販売状況といった数値を追えれば、活性化に関連する指標として取得できるのではないかと思う。勝手なことを申し上げたが、私からは以上。

環境創造課

ありがとうございました。農業製品について指標は取っていないが、入込客数については、登山小屋の宿泊数数値も含めている。観光協会を通じて、様々な数値を頂いているので、ある程度カバーは出来ていると感じている。また南アルプスユネスコエコパークは、3県10市の周辺自治体で運用している状況で、静岡県も入っていることから、今後も連携を図っていきたい。

事務局

ありがとうございました。続きまして、北大路委員お願いします。

北大路委員

エコパークに関連する他の団体との連携や交流する取組はあるか。市民の方が関心を持つようなイベントを実施するような形式か。

環境創造課

おっしゃるとおりである。例えば、先日行われたTGC（東京ガールズコレクション）のイベントに出展を行い、南アルプスの動画を流すといった普及啓発をしている。

北大路委員

イベント自体の市民認知度は高いか。

環境創造課

イベントそのものの認知度はあるが、南アルプス関連のブースをめぐってきているかどうかは懐疑的である。認知度が高いイベント等への出展を通じて、南アルプスへの興味を持ってもらい、認知度を向上させるよう取り組んでいる。

北大路委員

なるほど。数値から見ると、エコパークの認知度が5割程度に留まっていることから、その要因が何なのかが気になった。

環境創造課

地理的にも遠く、身近に感じにくいという所が要因になっていると考えている。

北大路委員

承知した。指標について、資料に掲載している以外にも指標があつて、管理していることはよくわかった。質問だが、高山植物種数について、これは増えていくものなのか。

環境創造課

申し訳ないが、その点は専門家でないと回答が難しい。指標の意味としては、平成25年にエコパークとして登録された際に、調査した植物数である。これを維持していくことを目標としている。減らさないことは、とても重要なことでございます。

北大路委員

難しい指標を設定しているという印象を受ける。数字が動かないものを指標として取り扱っており、減らないということあるかもしれないが、増えることもないとなると、市の取組が直接的に影響を与えているかが見えにくい。指標は、やったことが直結する形のアウトカム指標が望ましい。数値が硬直化してしまうと、取組んだことの成果が見えにくいので、もう少しレベルを下げた取組んだことの結果が見えるものに設定した方がよいと感じる。

また、令和4年度に調査地を変更したという点について、よほどの理由があつて調査地を変更し、その結果数値が落ちているという風に見えるが、計画期間が続く限りは、前提条件を変えない方が良く、並行してこれまでと同様の条件で指標を追ったほうがいい。特に今回は数値が下がっているため、活動が停滞しているように見えてしまう。この指標を用いて説明していくときには、注意して取扱った方がよい。

環境創造課

調査地変更とあるが、並行して同条件での取得はしている。これまでのアンケート調査は、イベント会場で行っていた。イベント会場に来場する方は、比較的環境分野に関心が高いと考えられるので、その方たちを対象にアンケートを取得するのはどうかと考えた。令和4年度からはイベント会場に加えて庁舎に来場した方に無作為にお声がけしてアンケートを取得している。

北大路委員

なるほど。調査地変更が、数値に大きな影響を与えていることは理解した。これらの指標の調査方法については、研究が必要かと思う。指標や調査については、米原先生もいるので、このあと意見を参考にしてみたらよいと思う。

加えて、この後木下委員からも御発言があるかもしれないが、里地里山に関する指標についても検討が必要と思う。市が活動した内容について、より敏感に反応できるような指標設定が可能であると思う。あさはた遊水地は、自分も良く行った。その活動状況ということであれば、インパクトがある指標設定ができるのではと思う。

また、有害鳥獣に関する指標について、今は「防除面積」を指標に設定しているとお見受けするが、多くの団体で「被害額」を設定しているので、その方がわかりやすいと思う。

事務局

ありがとうございました。続きまして木下委員よろしくお願いたします。

木下委員

自分は、あさはた緑地の指定管理を受けている立場。あさはた緑地は、「自然との共生を図る都市緑地」という位置づけがありつつ、活動評価をどのように実施していくかという点は所管課である緑地政策課とも相談しているところである。

他の委員からもあったとおり、指標について質問がある。指標について、目指してきたライン達成しておきたいラインの記載がない。絶対値として提示されているが、目標に対する達成度合いは出ているのか。令和4年度時点でどこまで持っていきかけたのか。

事務局

4つの指標について補足する。エコパークについては3つの指標があり、各年度で目標を設けて実施している。里地里山に関する目標値としては、前年度活動している団体の継続率80%程度の目標にして取り組んでいるところである。里地里山に関しては、資料の指標として団体の継続率と新規団体の立ち上げ数をグラフ化しているが、活動数として毎年50団体程度を維持していくことを目標としているような状況で、団体数の維持についてはおおむね達成できているという評価である。

木下委員

ありがとうございます。あさはた緑地は利用者満足度90%以上という指標設定にしているが、供用開始前に調査した段階で既に84%あり、そこから2%ずつ増えていくという設定になっている。しかしながら、どの政策を打ったから2%増えたかという分析ができない。

行政政策として、成果をすぐ把握することが必要と思うが、なぜその政策を打つのかという理由の部分、社会変化の部分を知る指標を設定するところに、いろいろな知恵が必要なのかなと感じている。

3次総期間中のエコパークに関して、資料4ページ目に「自然との共生を推進する」という形式のみだったものが、4次総では「オクシズの森林文化を育てるまちの推進」ということで、「8年後こうありたい」という姿と、そのためにこの政策と指標で管理し推進していくということが明示されているので良い。「あさはた緑地に関していえば、緑地単体で見れば指定管理施設の一つだが、その上の概念である都市公園全体の在り方のようなものが、総合計画などの上位計画に落とし込まれていくと、何を目指していて、そのために何が必要なのかということがより考えやすくなると感じた。

もう1点、私が取り組んでいるSDGs、市民活動に関することになるが、総合計画のメリットの1つは、分野横断的に施策を考えることができること。ただ、政策を細かい部分まで詰めていくと、どうしても担当課にフォーカスされてしまう。せっかくSDGsも活用してい

るので、1つの項目が多くの分野に携わっていることが可視化されると、制度してより良いものになると考えている。

例えば、環境を守ることを目指す際に、環境創造課だけで取組むわけでない。4次総の分野別計画で言えば、生活・環境分野においても脱炭素から防犯まで様々な取組と関連するSDGsの項目が記載されているが、これらがどのような関連性で繋がっているかが可視化されると良い。例えば、自然環境や生物多様の保全をしたときに得られる効果は、希少な植物種数が維持されるというだけでなく、環境学習で言えば教育という観点でも影響を与える。特定の政策や施策を打ったことにより、副次的に得られる効果（森林が守られることで、副次的に災害防止といった防災機能の強化に繋がる等）もあるはず。様々な物事は繋がりを持っているので、総合計画という特色を活かし、分野横断的に政策というパッケージにして表現できるとより良くなるのではという印象。私からは以上。

事務局

ありがとうございました。源委員お願いします。

源委員

これまで委員の皆さんが言ったことと重複するが、指標を確認しながら、これまで取り組まれた事業と、進めてきた政策とがどう関連しているかという視点で資料をみていた。やはり、かなり難しい指標をとって管理しているという印象がある。各事業において現場で取組まれていることが、直接的にどのような成果に結びついているのかというところを指標にしたほうが取りやすいのではと感じた。

指標は、「取組をどう改善できるか」ということを考えるための情報であると考えたときに、資料8・9Pのロジックを自分なりに考えて整理してみた。例えばエコパークについて、現在は、植物種数、ライチョウ、エコパーク認知度を上げているが、取組内容を見ると、市民の野外活動支援といった、市民活動や登山者ケアといった市民に対するインパクトという要素がある。このため、植物の保護といった環境保全に関する指標に加えて、市民目線での指標を取得しても良いと感じた。

もう1点、あさはた緑地に関しては、里山保全団体や市民活動団体の活動がもたらしたインパクトを様々な形で取得できるのではと思う。これが適切だということは言い切れないが、例えば、活動した方や利用者によってどのような影響を与えたか（自然を大切にしようと思った、生活と自然の関係性を自分ごとのように考えるようになったなど）という観点で指標を考えてみたらどうか。これは私的な主観であるが、評価指標は数値指標でなくてもよいので、市民の何かしらの変化を目指して取り組んでいる場合、主観的な部分をアンケート調査で定量化していくといったやり方も考えられる。より直接的あるいは中間的な成果を捉えることで計画改善に繋がっていく。

また、質問だが、4次総について、4次総の5大重点政策「オクシズの森林文化を育てる

まちの推進」が3次総の次の形という認識でよいか。

企画課

委員がおっしゃるとおり。関連の深い部分である。

源委員

承知した。そうすると、午後に議論するオクシズ分野とも関連してくるということか。

企画課

オクシズとも関連が深くなっている分野である。

源委員

承知した。先ほど説明があった資料P13の4次総への反映についてだが、エコパークの認知度が低いと、認知度向上を図っていくという文言と、現在示されている計画の文言が直接的に結びつかない。どちらかという、持続的な経済活動が営まれるまちづくりを目指す手段として自然環境の保全があるという捉えと考えた。ただ、自然環境を保護することの意義は大きい気がしていて、それと経済発展をどのように両立していくかという戦略が難しい。自然環境を保護するという3次総で上がっていた点が、重点政策の作戦目的に入っていない部分に理由があれば伺いたい。その意味では、ロジックモデルについて、オクシズの自然環境が保全活用することで、雇用と仕事が確保されているという結びつきがあるが、雇用と仕事を確保する手段として環境保全があるという認識でいいか。

企画課

まず、オクシズについてだが、静岡市の8割が山間地であり、それらの地域をオクシズと呼称していると考えていただければと思う。オクシズには、観光施設や人の居住があって、気軽に行ける地域もあれば、南アルプスのように人も居住していない山深い地域がある等、様々な特色がある。5大重点政策「オクシズの森林文化を育てるまちの推進」では、もちろん南アルプスのような地域も含んでいるが、どちらかという、軸足を人が住んでいる地域においている。市街地もそうだが、山間地においても人口減少が問題となっており厳しい状況にあることから、オクシズを持続可能な地域にしていこうと取り組む中で、南アルプスの取組が関わってきているという位置づけになっている。

一方、今評価いただいている3次総重点プロジェクトは環境保全に軸足を置いてきた取組であり、両者をそのまま比較してしまうと、策定過程や趣旨の違いからずれているように見えてしまうという状況。

※この点については、13時45分開始の「オクシズ地域の活性化」に対する議論前に事務局から発言追加（後述）

事務局

ありがとうございました。米原委員お願いします。

米原委員

これまでの説明と各委員と市の質疑を興味深く、聞かせてもらった。時間も押しているの
で、できるだけ重複がないように、ポイントだけお伝えしたい。私からは、やってきたこと
についてのコメントと指標設定について、4次総への接続と反映について、発言させていただ
く。やってきたことの成果について、3次総期間中は、「発信」について力を入れて取組
んできたと認識した。南アルプスという森林が大部分を占める地域と、里地里山などの都市
の緑地という2本柱で、「自然環境の保全」を山間地域だけでなく、都市周辺地域という両
輪でやってきた点は、非常に素晴らしいアプローチだと感じた。他方、そのアプローチで取
組んでいることが、しっかり伝わるような評価の仕方があってもいいと感じた。つまり、静
岡市ならではのアプローチすなわち静岡市ならではの自然環境がこのように活かされている
ことが伝わるような、評価のデザインになっていると良いと思いながら伺っていた。

それから指標について、既に議論がなされており、木下委員の発言とも関連するかもしれ
ないが、指標には「満足している、認知しているというレベル」、「その内容が正しく伝わっ
ている、理解されているというレベル」、「理解された内容を行動に移しているというレベ
ル」、「個人を超えて、第三者や社会に対して波及効果を及ぼすレベル」といったように、様々
なレベル感があって、設定する際にはどのレベルを目標にするのかという点が大事。

また、鈴木委員からもお話があったが、資料P10にある情報発信について、3次総期間
中の取組により、フォロワーやサポーターが何人いる、PVがどれだけあったかが記載され
ている。これは知ってもらうための努力をし、一定の効果があつたということだと思うが、
次の段階として、理解や行動、波及効果という点にどう繋がっているのかを考えていく、す
なわち、4次総ではその部分を確認するという視点で指標を考えていかないと、3次総の上
書きになってしまうように感じる。その点が、次の指標を考える上でのポイントかと思う。

また、高山植物種数の指標についての議論については、私も同意見。ロジックモデルに効
果・施策・活動が記載されているので、ロジックモデルをベースに、質的なもの、量的
なものを含め、どの部分をどのように指標として反映していくのかを考えていけば、整理さ
れてくると思う。

それから、サンプリングについて、今までイベント会場で取得していたものを市役所に変
更したというお話があった。3次総は、前期4年、後期4年の8年間という計画期間で、4
次総も同様の期間になると思っているが、原則としてその期間中はサンプリングの方法を
変えない方がいい。サンプリングの方法や質問紙の文言を変えると、経年データの比較はで
きなくなるというのが社会調査の基本。

例えば、前期4年間に同じ対象に対して継続的にデータを取っていくと、1年ですぐに成
果が出ることなんてほとんどないので、毎年同様にサンプリングして、それが4年後にどの

ぐらい変化があったか、「何が良かったのか、悪かったのか」ということが比較できる。ロジックモデルと紐づけた指標でデータを取っていれば、ロジックモデルに照らしてかなり議論がしやすくなる。理想としては、前期4年が終わった時点で、「4年間で何が変わったのか」「後期4年間で何をしなければならないのか」ということエビデンスをもって振り返る機会が持てれば素晴らしい。そのように取り組むことができれば、4次総が終了する8年後に「8年前と比べてどれだけ変わったか」あるいは、前期が終了し後期に移行する際に方向性をシフトしていた場合は、「そのシフトが良かったのか悪かったのか」、そういう議論ができるのではないかと思う。その点を考えながら、指標の設定や調査方法を検討すると良いと感じた。

時間も限られているので最後に、4次総への反映と接続という点について、既に源委員からも指摘があったが、資料P13には、今までは認知度を課題として取り組んできたが、今後は、現地体験や市民参加を通じた認知度の向上や自然環境の保全に取り組んでいくということが記載されている。一方で、5大重点政策の概要に記載される目指す姿には、市民参加型の自然環境の保全といった単語があまり出てこない。その部分の接続がどうなっているのかという印象はある。あさはた緑地のような里地里山が車で駅から20分で行ける、しかも南アルプスのような地形もある。どの自治体も持てるわけではない環境が静岡市にはあるという認識の中で、自然保護やSDGsを考えていこうというアプローチが資料P13に書かれている気がするが、それが5大重点の取組の中に入っているのもよいのではという印象を受けた。5大重点政策の指標設定に係る方針には、「オクシズの自然、生活利便性の向上」と、「自然を活かした雇用と仕事の確保」の2つが並んでいる。例えば、市民参加型の自然環境保全に取り組んでいく、すなわち、市民が自然環境保全の「プレーヤー」になっていくことを政策的に取り組むことが想定されるなら、そのようなニュアンスが入ってもいいのではと感じた。また、生活利便性向上の指標が定住人口と移住人口になっていて、これは、「便利だから、間接的に人口が増える」というロジックかもしれないが、もしかしたら、「自然環境に関心のある人たちが集まってくるまちをつくることで、それにより人口が増える、定住者が増える」というロジックも成り立つかもしれない。同じことが「雇用確保」にも言えて、計画で進めたいことを計測する指標が網羅的に設定できているかという点は気になった。時間もかなり押しているので、私からの意見は以上。

事務局

御意見ありがとうございました。時間になりましたので、「自然との共生」分野に係る議事を終了します。

※3次総でのユネスコエコパークの取組と4次総の関係性について、13時45分開始の「オクシズ地域の活性化」に係る評価の前に事務局から次のとおり追加説明

評価資料の最終頁に、3次総重点プロジェクトで取り組んできたことは4次総の分野別

政策と5大重点政策に反映している旨を表記している。午前中に実施した「人と自然との共生」に係る「環境保全の取組や考え方」は、5大重点政策よりも、分野別の政策に反映されている側面が大きい。他方、これから議論するオクシズについては、3次総で取組んできたことが5大重点政策に反映されている側面が大きくなっている。午前中の議論の中で、その点を事務局から発言することができず、申し訳なかった。

日 時	令和5年3月15日(水)11:30~13:45 (12:00-13:00 休憩)
対 象	静岡市第3次総合計画 重点プロジェクト 【文化都市】静岡文化の進化(まちは劇場の推進)
委 員	北大路信郷 委員、源 由理子 委員、米原 あき 委員、伊藤 史紀 委員 柚木 康裕 委員
市出席課	(主な説明課)企画課、まちは劇場推進課 (陪席課)観光・MICE 推進課、文化振興課、産業政策課、商業労政課 (事務局)総務課

議事内容

事務局

それでは、【文化都市】静岡文化の進化「まちは劇場の推進」について、資料の説明を各課からお願いします。

《主な説明課から 資料の説明》

事務局

説明ありがとうございました。それでは、各委員順に指名しますので、ただ今の説明及び質疑等を通じて、御意見をお願いします。まずは北大路委員からお願いします。

北大路委員

「まちは劇場」と「文化」という言葉のイメージが異なるという印象を受けている。資料P6の指標について、「文化活動を行っている市民の割合」が40%以上増加しているが、何か理由があるか。

文化振興課

平成27年当時に取得したアンケートでは、家庭内での映画や音楽鑑賞などを文化活動からは除外する形式で取っていたが、コロナ禍も踏まえて、令和3年度アンケートではそれらも含める形式で取得していることが大きな要因である。

北大路委員

なるほど。質問文や考え方が違うということになると、直接数字を比べることに意味はない。このような表記で資料を出してしまうと誤解を生んでしまうので、注意して取扱う必要がある。また、「文化」という言葉だけでは幅が広く、人によって受け取り方が変わってしまう。資料P4の政策の位置づけ欄に、「芸術文化等の創造活動」という言葉が記載されて

いるが、これを聞くと「絵を描く等のクリエイティブな活動」を指すというイメージがしやすい。なので、例えばアンケートでは、「文化」という単語のみで漠然と聞くよりも「芸術文化等の創造活動を身近に感じられますか」という質問にしたほうが少なくとも良い。また、アンケート調査は質問文を固定しないと比較できなくなるので、その点も併せて注意した方がいい。

加えて、「まちは劇場」という単語の意味についてだが、例えば、屋内で自らが絵を描くということは、劇場的ではないので含まれないという認識でよいか。話を聞いていると、イベント中心の取組という印象を持っていて、そうでないと、観光交流客数とリンクしてくることが考えにくい。そうならば、「まちは劇場」を説明する際には、イベント系の活動であるというイメージをわかりやすく言ったほうがよいと感じる。

まちは劇場推進課

委員が仰るとおり、「劇場」という言葉は「ホールでのコンサート」などの取組をイメージすることが多い。もともと「まちは劇場」は、本市の特徴的な取組である「大道芸」に端を発しており、道路等の公共空間を含めて、まち全体がイベント等により賑わっているという概念。「まちは劇場」の概念と取組のギャップは、委員の言うとおりのので、そこを解消していく説明や取組に今後努めていきたい。

北大路委員

ありがとうございます。

事務局

ありがとうございました。12時になりましたので、一旦議論を中断します。13時から再開しますので、よろしくお願いします。

－休憩－

事務局

13時になりましたので、議論を再開します。米原委員お願いします。

米原委員

今まで取り組んできたこと、指標の関係、4次総に向けての接続について簡単にコメントさせていただきます。

これまでの取組について、資料4ページにあるように、「ワクワクドキドキを感じる仕掛けづくり」を「コンテンツづくり」、「担い手づくり」、「空間づくり」、「情報発信」という4つの柱を立てて取り組んできたということで、この4つが資料8～9ページの事業の実施内容と照らし合わせ、どれに該当するかを整理しながら聞いていた。政策で目指すこ

とと事業内容が、整合的に関連している事がわかり、政策的にも整合がとれた活動していると感じた。

ここで、北大路委員からも指摘があったが、取組がどう達成できたのかを確認するとき用いるのが評価指標である。資料6 ページの意識調査はとても大切だが、「文化」をどう想定するかは個人差が大きく、指標や調査方法を設計する時に工夫が必要。

サンプルリングの原則として、教科書的な言い方をすると、経年変化を見るときは質問を変えないことが基本であり、聞き方が少し変わるだけでも、回答者側のイメージに大きく影響を与え、結果が大きく変化することが社会調査ではよくある。場合によっては、誤字脱字ですら修正するなという意見もあったりするぐらいで、回答傾向に影響を与えないように注意しないと経年比較をすることができなくなってしまう。

また、サンプリングは、どういう人たちが答えたかということも重要。例えば、「ある時点ではA地域の人たちに聞き、別の時点ではB地域の人たちに聞き、あたかも同じ地域で調査したように意図的に報告すること」が問題になるなど、社会調査はセンシティブなもの。経年変化を確認していくには、同じ質問、質問票を使い続けるということと、同じ方法で調査する、データを集めるということが基本になるので、参考にしてくださいと思う。

関連して、資料6 ページに掲載されている指標について、他にも指標がある中の代表的なものを掲載していると思うが、仕掛けやコンテンツ作りに関するデータや、担い手づくりに関する指標が資料からは読み取れなかった。4つの柱に対応するような指標があれば教えてほしい。

最後に4次総への反映について、4次総の目指す姿に「市民の暮らしが豊かになる」「国内外の人々が活発に交流する」という点がメインテーマとして上がっている。「市民の暮らしが芸術やスポーツを通じて豊かになること」は、どういうことかを掘り下げると、それが指標に繋がってくると感じる。政策の狙いや事業の考え方の部分に具体的なアイデアが引き込まれていると思うので、それらが4次総重点政策の6つの指標に関する取組に具体的に結びついていくと良い。

もう少し具体的にいうと、例えば指標1「身近に文化芸術を感じるまちだと思ふ市民の割合」について、既に北大路委員が指摘されたように、「文化芸術」は人によって捉え方が異なるため具体的な表現を検討する必要があるということや、質問の仕方として、「市外の人たちにとって、静岡市は文化芸術のまちとして自慢したいと思えるかどうか」などが考えられると感じた。静岡市には特徴ある取組が多くある。「文化芸術」や、前段で議論した「自然保護やエコパーク」もそうなのかもしれない。様々な特徴がある中で、静岡市の自慢ポイント、市外の人に知ってもらいたいポイントはどれかという調査を行い、その中で「文化芸術」を選ぶ人がどれぐらい増えているかを確認するという方法もある。

また、指標2「文化活動を行っている市民の割合」については、聞き方に注意する必要がある。「文化活動」について、資料6 ページに文化祭ポスターの写真が掲載されているが、中学校の文化祭などもカウントしているのか。もしそうなら、市民の方の大多数が文化活動

をしていることになると思うが、それでいいのかという点が気になる。

例えば、市民が静岡市で何かやりたい、歌でも演劇でも何でもいいけどやりたい、あるいは何か見たい、参加したいと思った時に、いつでもできる場や機会があることを市民が認識しているかどうかなど、もう少し具体的なアクションに繋がるような聞き方をすると、指標2の意図がより反映されるのではと感じた。

最後に1点、スポーツ関連について、指標5に「スポーツをすることが好きな小・中学生の割合」を確認していくということが書かれている。悪くないと思うが、『市の取組が「子どもたちがスポーツを好きか嫌いか」について影響を与えているかどうか』をみるには、少し距離があると思う。外部要因も大きいと思うので、保護者の意識とセットにして調査したらどうか。特に、小学生が運動をやるやらない、その機会があるかどうかは、保護者がスポーツに関心があるのか、子どもに取り組ませるかという要因も大きいと感じる。これは「文化芸術」においても同じ。保護者の行動や意識が大きく影響すると思うので、その視点もセットにして、アンケート調査や指標を考えるとよい。これは、指標に保護者の意思を入れればいいという単純な話でなく、政策的な取組やアクションを起こすときに、保護者と子供をターゲットにするなら、保護者へのアプローチもセットで取組を考えるということが必要である。

まちは劇場推進課

ありがとうございました。指標設定等の考え方、参考にさせていただく。他の指標にどのようなものがあるかという質問について、アウトプットに近い指標もいくつか設定している。例えば、資料の写真の中で、商店街で演奏する、まちなかで大道芸をするといった活動ができる場所を「まちげきスポット」として設置しており、その数を指標とする、「まちげきスポット」で活動するパフォーマー等の皆さんの認証制度を設けており、その認証数といった指標を設けている。

また、難しいと思いながら意見を聴いていたのは「豊かになる」ことに関する指標。「シビックプライド」にも絡んでくるが、例えば「人に自慢したくなる」というような視点でも考えていきたい。

事務局

ありがとうございました。それでは柚木委員お願いします。

柚木委員

他委員の皆様とは違い、評価に対しては素人なので、見当違いな発言もあると思うが、ご了承ください。

私は、マネージャーのような立場で、現場レベルの創作に立ち会っている。その中で、まちは劇場推進課による取組により、「まちは劇場」という言葉が徐々に浸透していることを

肌で感じているところ。認知度が上がってきていることを感じるのは、1つに、まち劇場推進課が2022年度に実施して取り組んでいる「まちげき TRY' 22」という取組による成果だと思っている。様々なイベントや取組が、まちは劇場推進課の支援によって行われており、まちなかにおいてもその取組が様々なところで見られるようになった。これは「まちは劇場」を知らない人が、まちなかで取組まれるパフォーマンスなどをみて、「何だろうあれ」と感じる事が繰り返される中で、だんだんと認知されてきたのだと考えている。

ただ、そこで1つ問題になってくるのが、「認知度」は上がっているが「理解度」はどうかという点で、「まちは劇場」に対する認知度と理解度のギャップをどう捉えたらよいかと感じている。例えば、「まちげき TRY' 22」の取組では、その性格上、マルシェなどが行われる。もちろん食文化という観点で関係してくるが、「まちは劇場」で推進している「文化芸術」とは少し違いがある。「まちは劇場」では様々な取組を行っているが、そこに参加している方たちですら、その理解度に大きな隔たりがあることを現場で感じる。そのあたりを丁寧に伝えていかないと、ただのイベントでしかなくなってしまう。現状として、そのような認知に留まっているという点ももったいないということを実感している。

この点については、定量的な数値だけで評価できるのかということに疑問を感じていて、誰がどのように考えているといった定性的な部分と組み合わせて、複合的に評価することが必要なのではと思う。

私はよく美術館に行くが、日本は美術鑑賞大国。コロナ前は特にそうだったが、例年、世界の美術館入場者数ランキングのTOP10に、日本の美術館が2～3館は必ず入る。その点だけに着目すれば、日本人は文化芸術に対してすごい理解があると感じるかもしれないが、現実には少し違う。定量的な数値だけで判断することになってしまうと、例示したようなギャップを捉えることができないと個人的に考えている。

また、資料に掲載されている指標について、市民に対し意識調査を実施しているとのことだが、企業や学校に対しても意識調査を実施しているか。特に企業。「まちは劇場」の取組が、観光や産業に関わるなら、当然企業にとっても関係してくるため、調査が必要と感じている。

なぜ、企業に対する意識調査が必要かということだが、例えば今、静岡市が進めている市民参加は、あくまでも個人レベルに対するアプローチに留まっている。市民パフォーマーは、ほぼ必ず何らかの仕事あるいは学業に取り組んでいる。両立パフォーマーや複業パフォーマーという言い方をしているが、地方ではプロではなく、そのような方が「文化芸術」を支えている。つまり、「まちは劇場」の取組を推進するために、市民パフォーマーが大切で、その大半は、両立・複業パフォーマーである。そう考えると、変えないといけない意識は、企業側にもあると感じている。市民パフォーマーが輝くまちだとしたら、輝かせるためのワークライフバランスみたいなものに取り組んでいくことは、非常に重要な観点。加えて、そのような企業が静岡市にたくさんあるということになれば、それは静岡市の特徴の1つにもなってくると思う。

このように、まちは劇場の取組や、活動主体であるパフォーマー等のケアといった観点を企業にも知ってもらうことが、アンケート調査によっても可能と考えるし、そういうアプローチも必要と思っている。評価に対しては素人なので、手法論等については細かなことは言えないが、考えていることは以上。

まちは劇場推進課

企業の協力が必要不可欠であろうという点について、例えば国際大会があるスポーツ等の場合、参加するために選手が公休をとって参加できる企業もある一方、文化や芸術分野のそれに対しては、支援できている企業は少ないため、そのような観点からの政策展開も必要だという御意見だったと思う。この点については、まちは劇場推進課、文化振興課、企画課など、市全体で考えていきたいと感じている。

事務局

ありがとうございました。源委員お願いします。

源委員

まず、柚木委員の「質的な部分をどう捉えるか」というのは非常に重要なポイントだと私も思う。私自身は福祉分野や少し文化芸術分野に関する評価に関わっているが、分野に限らず、政策として取組むことに関して、社会的価値や社会的課題解決を生み出そうとするプログラムは、質的な変化を勘案しない限りは、そのアウトカムは測れないと感じている。どの程度できるかは事業の性質にもよるが、質的な部分をアンケートで量的に見る取組も多く実施されていて、インタビューやグループディスカッションなどを通じて質的（定性的）な情報を合わせて評価することは必要だと、お話を伺って改めて感じた。私自身も、柚木委員のお話を聞いて、色々ヒントになることを頂いた。ありがとうございました。

説明や各委員の発言を聞いて思ったことであるが、資料4ページの目標について「交流人口の増加による地域経済の活性化を図る、賑わいを生み出す」という目標があり、それに向けて様々な取組を行っている一方で「文化芸術を通じて人々が豊かになる」という目標に対しては、指標だけをみると、資料からは見えにくかった。

「豊かさ」の考え方はとても難しく、人や年代によっても全く感覚が違う。そういう意味では1つの指標で測るというよりも、複数の指標で捉えるという考え方をしてもいいのでは。例えば学生に向けてあるいはシニアに向けて、といったように、ターゲットによって考えられる指標をそれぞれ設定して調査していくことができないかと感じた。

私自身、文化センターの学校への出前講座で色々取り組んでいる事業を評価しようとした時に、質的なものを量化するにあたり、「子どもたちがパフォーミングアーツに参加したり、音楽鑑賞をしたら、こんな変化が起こる」ということを考えながら指標を設定している。例えば、「子どもたちが今までより体を動かすのが楽しくなると思う」、「自分のすること、

言うことに自信を持てると思う」などが考えられる。これらは実際に指標として採用していて、評価調査で10年前に出前事業を始めたときとの比較で現在の指標を見たときに、文化芸術に触れた子どもたちが、そのように変化していったというデータがとなる。なので、難しいことはわかるが、取れないことはないと感じる。今後4次総でも、「人の心の豊かさ」のような指標を目標に掲げるのであれば、そのような手法も検討した方がいいのではと改めて感じた。

また、米原委員の発言内容と被る部分があるので、私からロジックモデルの関係で伺いたい。1つは、「静岡市民文化会館再整備」という事業は、政策全体の中でどういう位置づけになるのかを伺いたい。これは、文化センターとかホールを指すということか。もう1つは、ロジックモデルの中の「中心市街地活性化基本計画」について、これも目標との関係でどんな位置づけなのかを伺いたい。

文化振興課

市民文化会館再整備事業について、取組方針に関連して話をすると、日常生活の中で文化芸術のふれる場を創出するということを挙げており、再整備計画の中では、気軽に練習できる場所、発表できる場所も、機能として加えていくという方針である。そのような場を皆さんに使っていただいて、より文化に取り組みやすい環境を創る、親しむ機会を創るということを想定しているために、こちらに位置づけられている。

商業労政課

中心市街地活性化基本計画については、協議会を組んで、中心市街地の活性化に向けた取組をどうしていくのかということをもとめた計画である。本計画上においても目標値を設定し、通行量や商業関係、にぎわい、暮らしという4つ観点から計画を推進している。中でも、中心市街地のにぎわい作り、観光客の増加という観点でまちは劇場の取組と親和性が深いものとなっている。

源委員

ありがとうございます。中心市街地活性化基本計画について質問だが、「賑わいを生み出す」という点において、まちは劇場の取組と様々な連携をしているという認識でよいか。

商業労政課

計画内にまちは劇場に関するイベント等を位置づけ、連携して取り組んでいる。

源委員

例えば、柚木委員から発言があったように、企業とか商店街の様々な認識の変化みたいなものを数値として拾えるか。

商業労政課

商店街の皆さんの認識に関するアンケートはやっていないが、通行量調査を毎年実施しており、そこで来街した方に対するアンケート調査を協議会で実施している状況。

源委員

商店街及び文化会館について回答ありがとうございます。4次総に関連して、指標3「文化芸術施設の入込客数」について、文化会館や博物館、美術館の入込客数を指標としているが、文化施設をどれだけ市民が活用しているかという観点があってもいいと感じた。その際に、文化センター等でも、同じ人が来場するパターンが多いと経験上感じているので、あまり足を運ばない方が足を運ぶようになったということも行動変容になるため、それに資するような取組や事業があると良いのでは。

それから、先ほど学校のことを申し上げたが、子供たちが小さいうちから「文化芸術」にふれることは、「人の豊かさ」を考える上で重要だと思う。既に実施している若しくは今後取り込まれるのかもしれないが、学校や教育委員会との連携することは、1つの取組として良いのではないか。私からは以上。

事務局

ありがとうございました。伊藤委員お願いします。

伊藤委員

ほとんど意見は出ていると思うので、ここまで話が出てなさそうな2点を伺う。まず、文化スポーツと観光交流はかなり外的要因の影響が大きい分野。コロナはもちろんだが、大河ドラマに取り上げられている等、市の努力ではない要因で指標がプラス、マイナスになることが起こりやすい。このため、外的要因をどう捉え、指標や活動に反映するのかは、大事な視点と考えている。そのあたり、現時点で考え等があれば教えてほしい。

例えば、今観光分野では、全国的に追い風が吹いていて、静岡市の場合は大河ドラマの影響もある。そのような外的要因の延長をどのように考えて指標を設定しているのかが気になった。災害に関しても、マイナス要因ではあるが、4次総計画期間中のリスクとして考えられる。

2つ目は、文化・スポーツは市内の活動という点に、観光交流は市外から来てもらうという点に着目し、大きく分野を分けて整理しているように見受けられる。そうしたときに、文化やスポーツなどの地域文化は、観光としての魅力にも直結するもので、相互作用があるも

のだと思う。分野を超えて、どのように相互作用や相乗効果を発揮するかという視点は、分野を分けたからこそ工夫が必要と思う。その点について、何か考えがあれば教えてほしい。

まちは劇場推進課

まず指標と外部要因について、コロナや災害に係るマイナス関係は想定が難しいと考えている。逆に、大河ドラマなどについては、観光交流客数といった指標に対して、特に影響を与える部分と思う。が、指標設定については、概ねこれまでの増加率などを加味して設定してきており、今お話があったように、この影響があるから指標を上方修正するということは、あまり行われていないのが現状。

総合計画においてもロジックモデルや実施計画の見直しができるタイミングがあるので、外部要因についても考えながら、必要なタイミングで改訂できるように取り組みたいと思っている。

2点目、分野別の政策でいえば、「まちは劇場」の取組はまさに、分野横断的に取組む横軸の事業である。細かいことをいうと、「まちは劇場」は考え方によって、文化芸術だけではなく、例えば環境分野・福祉分野・教育分野は幅広いところ活用できる考えであろうと所管課としては認識している。しかし、市の組織を見たときに、どうしても餅は餅屋というところがあり、他の部局と連携して、「これは、まちは劇場の考え方で取組める事業だ」みたいな形で横断的に実施ができていないかと言われれば、正直至っていない部分がある。対策として、まちは劇場推進課から、まちは劇場の考え方を市民だけではなく、行政内部がしっかり理解し、各部局で取り組んでいることがまちげきに関連していることを認識してもらえよう、取り組んでいきたい。

伊藤委員

ありがとうございます。そういう意味では、やはり外部環境の変化に合わせて修正していくという修正主義で数字を見ていくこと、「まちは劇場」という分野を横断する取組を、市を挙げて取り組むということなので、組織の縦割りをどのように超えて協力していくのかという点を課題として取り組んでいくということですね。ありがとうございました。

事務局

それでは時間になりましたので終了します。ありがとうございました。

日 時	令和5年3月15日(水)13:50~15:00
対 象	静岡市第3次総合計画 重点プロジェクト 【文化都市】静岡文化の進化(オクシズ地域の活性化)
委 員	北大路信郷 委員、源 由理子 委員、米原 あき 委員、伊藤 史紀 委員 船戸 修一 委員
市出席課	(主な説明課)企画課、中山間地振興課 (陪席課)農業政策課 (事務局)総務課

議事内容

事務局

それでは、【文化都市】静岡文化の進化「オクシズ地域の活性化」について、資料の説明を各課からお願いします。

《主な説明課から 資料の説明》

事務局

説明ありがとうございました。それでは、各委員順に指名しますので、ただ今の説明及び質疑等を通じて、御意見をお願いします。

北大路委員

資料6ページに4つ代表的な指標が載っているが、中山間施設の入込客数がコロナ禍においても、そこまで減っていないという点について、率直にすごいと感じる。減ることは当たり前だが、大抵の市の施設は、コロナ禍前の1割お客さんが来るか来ないかという時に、さすが大自然の中の施設だなと。大変優位性があると思う。1つわかりにくかったのが、市産材の取引価格を割合で出しているが、令和4年だと11%ほど割高だという意味かと思うが、これは上がると良いのか、下がると良いのか。

中山間地振興課

静岡市産材が他と比べてどうかという指標なので、上がると良い。

北大路委員

なるほど。指標そのものが、あまり動きそうにないように見えるが、そういうわけでもないのか。これは政策的な努力で上昇していく指標なのか。

中山間地振興課

この市産材とは、森林認証材のことを指す。森林認証材として付加価値をつけることで、他の材木よりも一定の値段の高さを維持したいということで、他市産材と比較して 10%以上高い状態を維持する指標設定をしている。

北大路委員

なるほど。ある程度数値が維持できている点が、評価できるということか。指標自体に変化があまりなく、指標だけだとそもそも高くなるのがいいのか、低くなるのがいいのかということがわかりにくいため、説明を補足するか、別の視点で指標を考えてもよいと感じた。

実は、1点伺いたかった点がある。地域おこし計画をみると、2大目標が書いてある。1つ目は、UターンIターンなどの人口に関する目標が記載されている。私が面白いと感じたのは2地域居住と、中長期滞在という移住ではない観点の記載があること。2地域で生活することは今流行していて、中長期滞在も移住とは言わずに長期で滞在してくれるということ。これはとても興味深い観点だと感じているのだが、データを取ることはできそうか。感覚的な回答でも構わない。

中山間地振興課

市のメニューを利用した中であれば、ある程度把握することはできる。また、各地域のみなさんと情報交換を恒常的にしているので、その中で情報をとれるという可能性もある。

北大路委員

なるほど。移住についても数値を捕捉していることは良い。それに加えて、2地域居住や中長期滞在という観点を効果的に指標として利用できると、地域の魅力についてより細かい部分が分かってくると思う。

また、2つ目に、静岡型ライフスタイルの情報発信という記載がある。これは1つ目と比べても難しいと思うが、私にはこの静岡型ライフスタイルという概念がよくわかる。16年間住んでいて、静岡は少し行けば海があり、少し行けば山があり、いろんな生活ができる。都市に住みながらも、このような環境で生活できることは、とても恵まれた環境にあると思う。この静岡型ライフスタイルについて情報発信をされているか。

中山間地振興課

移住についてもそうだが、オクシズ全体のホームページやツイッター、都内の移住支援センターと協力して情報発信している。

北大路委員

静岡市に、深い駿河湾、南アルプスがあること、二軒小屋のような施設があることは意外

知られていない。「田舎暮らし」について、頭の中でイメージしている人は多い。だからこそ、この静岡型のライフスタイルをもっと強烈にアピールできないかと感じた。「オクシズ」についても、とてもいいネーミングだと思う。自分が住んでいたときには、この概念は無かった。資源は揃っているのに、あとはどれだけアピールをできるかということだと思う。

事務局

ありがとうございました。続いて、源委員をお願いします。

源委員

資料に掲げられている指標は、確かに説明がないとわかりにくいという印象を同様に受けている。別に指標として取得しているかもしれないが、1点伺いたい。

資料4ページのサブテーマを見ると、「活性化」という単語で括られている。これは、内発的発展による集落活性化支援という意味と思うが、これをどう捉えていくかが、掲載されている指標だけではわかりにくい。資料13ページのオクシズ生活拠点形成に向けた取組において、住民に対するニーズ調査的なアンケートも実施しているが、その中で「そこに住んでいる方が拠点として安心して過ごせること」を表せるようなデータを取っているか。取得しているなら、全体の指標として設定してもいい。「活性化したかどうか」を計測するには、おそらく認定数といった量だけでは見出すことができず、質的な観点でも調査する必要がある。これだけ緻密にアンケートを既に取りっているのに、4次総でも継続的に取り組まれているかどうかと感じた。

また、4次総でオクシズを重点政策に位置付けた理由、高齢化等の様々な要因で、地域が存続できなくなる危機感がある中で、4次総の8年間で政策施策を形成して、取組を見直しながらやっていかなければならないということがよくわかった。

その目線でロジックモデルの指標を見たときに、最終的なアウトカムを定住人口や移住世帯数だけで捉えてよいのかということは少し疑問に思った。もちろん、重要な指標であることは間違いないのだが、先ほどお話に上がった2地域居住など、様々な社会情勢の変化によって、把握した方がよいという指標は今後も出てくるのではないかと思う。指標は、同じ質問を同じ条件で継続的に取得することが重要だが、社会的な変化があったときに、新たに取得した方がよい指標は必ず出てくるし、それによって取組そのものを変化させなければならない。その時には、まずベースラインとして指標をとり、変化を見ていくことが必要。

中山間地振興課

住民アンケートの結果がどう反映されているかという点について、アンケートで「この活動が不足している」という意見をいただく中で、鳥獣害被害の防止や、高齢者の移動支援などを進めてほしいという声があった。その支援策を、生活拠点形成に向けた取組や4次総における生活利便性の向上という取組で進めていく予定である。

指標については、今住んでいる方やオクシズに移住してくれた方に、いかにして今後も住み続けてもらうかがある。委員の言うとおりに、社会情勢の変化などの状況に応じて、より細かく指標を設定して追っていくということも必要と考えている。

事務局

ありがとうございました。続いて船戸委員お願いします。

船戸委員

質問だが、資料6ページ「中山間地施設の入込客数」について、「中山間地施設」とはどのような施設か。また、入込客とは、どういうお客さんなのかを教えてください。

中山間地

中山間地施設について、市営温泉、キャンプ場、釣り堀等のレクリエーション施設、都市山村交流センターのような情報発信施設を指している。また、入込客数は、当該施設を訪れた人、利用した人を指している。

船戸委員

承知した。例えば物産展でお土産を買うといったお客さんは入っていないということか。

中山間地振興課

加工物販施設は入っていない。それらを含めると、+20~30万人増える。

船戸委員

承知した。移住世帯数について、移住の定義はどうか。例えば、全くゆかりのない人が都市部から来ることを指すのか、地元出身者だけどUターンで帰ってきた方を含めているのか、移住の定義は色々あると思うが、そのあたりをどうお考えなのか。

中山間地振興課

移住については、基本的にオクシズにゆかりがない方。補助を使う場合は、3親等以内は除くという形式で対象者と設定している。

船戸委員

なるほど。浜松市も含め、どの自治体もそうだと感じるが、移住に関する取組に対して自治体は、「移住世帯あるいは移住人数」にこだわる。ただ、実際にはどんな方が移住してきたかという観点がとても重要。子育て世代なのか、定年で帰ってきたのかなど、移住者によって全然違う。やはり将来的なことを考えると、地域が期待するのは、おそらく子育て世代

なのではと思っている。移住世帯数のような数字にこだわることはわからなくもないし、子育て世帯以外の移住を否定するわけでもないが、子育て世帯というのは、次世代を創っていく、地域の将来を考える上で有望なターゲット層と思われるので、そこに重点的に力を入れていく。そうすると、学校施設、保育施設、住宅施設といった形で横の繋がりが政策的に必要なはずで、そういう観点で人を呼ぶ、住み続けてもらうことも、他の政策とリンクさせていくと良いと感じた。

私は浜松市における政策にも一部関わっているが、静岡市のこれまでの取組を一通り見たときに、大きな違いはないと感じた。ただ、今後考えていく必要があるという視点が1つある。今過疎地域を抱えている政令指定都市は普通になってきている。静岡市の場合は8割が中山間地であり、地理的にも浜松市と似ているという状況の中で、同様の自治体については、そこにどう観光客や人を呼び込むかという政策になりがち。私は、市内都市部の子どもたちをターゲットにした取組を進めることも重要であると感じている。例えば、学校給食でオクシズ産の食材を提供する、あるいは環境学習の一環として静岡市内の都市部の小学校がオクシズに行って勉強するなど、市の中で都市農村交流を進めていく。この交流により、子どもに加えて保護者世代にもオクシズの地域的なアピールも可能であるし、隠れた地域資源の掘り起こしにも繋がっていく、また、これが内発的発展にも寄与する可能性があると思う。

また、資料13ページの生活拠点形成について、交通移動支援は各地域で行われていると思うが、ガソリンスタンドについては大丈夫か。民間に任せていると撤退のリスクがある。今後のロードマップとして、住民主体の体制に向かうのか、あるいは「支援」というのは、民間を支援し、民間が主導の体制に向かうのか、どちらを想定しているか。住民主体の体制づくりに向けてという記載があるので、最初は民間主体で、いずれは自治体や自治会、NPOなどが担っていくというように、ロードマップがあるか。

中山間地振興課

ガソリンスタンドについては、地域の中で維持できている。ただ、委員の言う通り、将来的なリスクがないわけではないと思うので、その点についてはしっかりケアしていきたい。また、買い物支援について、葵区では、民間事業者が市の支援等がない状態で、地域を回る取組が始まっている。ただ、営業時間の関係等により、回れない、カバーできない地域もあるため、その地域については、自治体との連携した買い物支援策を検討している。この支援策について、最終的には自律的な運営をとる意識はあるが、いずれにせよ、人が大事であるということになってくるので、その点をケアしながら進めていかなければならないと感じている。

船戸委員

そうなると自治会というよりはむしろNPOのような形を作っていくイメージか。環境整備として、交付金交付事業のようなものを用意して、住民の人たちに利用してもらい、組織化に繋げていくというような取組も必要かと思う。

中山間地振興課

委員が言うように、浜松市の事例なども研究し、進めていく必要があると考えている。

船戸委員

都市農村交流についてはどうか。小学生を対象にしたツーリズム事業あるいは食育という観点で、農林水産物、お茶やみかんなどを組み込むことで、都市部の方を山間地に取り込んでいく、子どもをターゲットに進めていくという戦略も必要かと思っているが。

中山間地振興課

教育との連携は重要だと思っており、給食という観点で言えば、オクシズや、市の前の海で取れた海産物「しずまえ」と呼んでいるが、オクシズやしずまえを学校給食に取り込むことは既に実施している。また、オクシズも含めた静岡市のことを、子どもに知ってもらおうという取組で、学校内で「静岡学」という講座を設ける、「少年自然の家」のようなレクリエーション施設を利用してもらうことをアナウンスしている。

事務局

ありがとうございました。米原委員お願いします。

米原委員

まず質問したいが、「オクシズの森林文化を育てる」という言葉について、「森林文化を育てる」とはどういう意味なのか教えてもらいたい。

中山間地振興課

先ほど都市農村交流の話があったが、都市部とオクシズ地域が支えあって、今後も住み続けられる地域を形成していくこと、また、自然環境を活かして賑わいの創出につなげていくことなどにより、持続的な中山間地振興を行っていくことが「森林文化を育てる」ということであり、「森林文化」には様々な面が凝縮されていると考えている。

米原委員

これまで評価してきた政策と比較して規模が大きく、様々な要素が多く盛り込まれているため、「誰が」「何をする」という整理が難しいという印象。まず、資料6ページには指標

が、資料4ページには取組の重点目標やサブテーマがまとめられているが、この指標と目標やテーマが、どのように繋がっているかを見ていた。既に他の委員からも指摘があったが、各指標で何を測りたいのかが少しわかりにくい。提案という意味も含めて聞いてほしいが、先ほど中山間施設とはどんな施設かという船戸委員からの質問があったが、施設のタイプごとにおそらくターゲットが違う。ターゲットが違うということは、その施設に来て欲しい人たちの属性なども変わってくるはず。よって、中山間施設という括り方をするのではなく、ターゲット別に分けて指標を立てることをしたほうが良いのではと感じた。既にそのような観点で別のデータを持っていたら、スルーしてほしい。

先ほど「森林文化とは何か」を質問したベースには「誰が」「誰の」という観点がある。この政策には、高齢者の方、山間部に来てほしい人、移住してほしい人、様々なタイプの人々が想定されているが故に、評価する時も、誰からどんなデータを取るのかを考えながら設計できるとわかりやすい。データを取るだけでは評価ではなく、データを基に検討して、誰に対して何をすればよいかという改善に結び付けることができるようにしていくことが大事。

また、「地域が主体となる新規事業件数」という指標について、新規事業増加を目指すことがもう明示されているので、増加が前提になっている指標だと思うが、4次総が4年、8年スパンであると考えたときに、例えば初めの1年は増えるかもしれないが、それが同じペースで8年間増え続けるかという視点や、そもそも件数が増えること自体が良いことなのかという観点で考える必要があると思う。つまり、量がある程度のところで止まっても、新規事業として立ち上げた取組が継続できているかという側面、すなわち取組の質についても考えていきたい。

件数だけを指標にするとよくあるのが、ある程度増加した後に全然増えなくなる。増えてなくても、ものすごく質が良くなっている場合は、評価されるべきと感じる一方で、ある程度増えた後に、何もしてないのに横ばいで数値が続いているのであれば、何かテコ入れをしなければいけないはずで、そのような判断ができないような指標だともったいないという印象を受けた。

また、漆の里構想について、資料に掲載されている指標は、試験植樹の面積となっている。他に様々な情報を持っているかもしれないが、漆を地域の活性化に結び付けようとしたときに、植樹面積よりも、仕掛ける職人さんが1人しかいないという点がポイントなのではないか。職人さんを増やすことも大事なのではと。

最後に、資料18ページ「暮らし続けられる中山間地域」に関して、5大重点政策の概要には医療という言葉があった。過去に評価したトピックで、中山間地域の医療と高齢化の問題が議論の中でクローズアップされた記憶がある。それが今回の議論に出てこなかったの、既にある程度の解決を見ているのかもしれないが、どうなったのか気になった。

また、高齢者を対象としたときに、医療を中心に考える必要性は高くなる一方で、2拠点生活などで若い人たちに入ってきて欲しい場合には、医療はあまり表に出てこず、むしろ通信環境などが大事ということになるだろう。そのあたりについて、高齢者対策と若者対策と

いう点をどう整理していくのかという点も気になったところ。私からは以上。

事務局

ありがとうございました。1点事務局から補足する。中山間地の医療については、昨年度の委員会で地域包括ケア関係政策の中で議論があった。介護関係の仕事に従事されている方から、中山間地のヘルパーさんや担い手がないという意見をもらったところである。

中山間地振興課

指標については、現状数を追っている側面が強いが、委員が言う通り、生活における利便性はその人の属性によって変わるものである。ターゲット毎に指標をどう取得していくという点は、我々も問題意識としてもっており、4次総では細分化した形で指標を追っていくことも検討したい。

また漆の里構想について、目指すところは、産業化や市内の地産地消である。その中では、植樹面積を増やせばよいということだけでなく、理解をしてくれる方を増やす、人材育成を推進するという視点も必要だと思っている。

医療について今回触れなかったが、課題になっていて、診療所のお医者様も高齢化している。住民からは、近くに診療所がなくなり困っているという声もある中で、例えば、看護資格を持った方が各戸を回り、健康状況を確認する取組を試験的に実施することを、遠隔医療に関する取組と併せて検討しているところである。

米原委員

今はドローンを用いた薬の配布等、様々な試みがあるので、AI やテクノロジーと掛け算して取組むことを視野に入れる可能性があると思い、質問した。既にそういったことも着想されているということで、承知した。ありがとうございました。

事務局

ありがとうございました。続いて、伊藤委員お願いします。

伊藤委員

ほぼ意見は出ているという印象だが、それらを避けてコメントさせてもらう。私は自治体の方と仕事をさせてもらう機会が多く、地域おこし協力隊の活動支援もやっている。この中で1つ感じているのが、日本全体として人口減少が進んでいるので、移住者の獲得コストが上がっていること。同じ10人獲得するのに10年前と今、10年後だと、だいぶコストが変わってくると思っている。4次総でこれくらいの人数の移住を目指そうとする中で、必要なインプットは確実に上昇するため、どのように見込んでいるかが気になった。

加えて、移住後の流出も気になっている。様々な自治体間で課題になっているのが、制度

を利用して移住した方が、5年間の縛りが終了した後に別の地域へ移住し、移住先で別の報奨金もらうような方もいるという話を聞くので、そのあたりをどう考えるのか。

これとは別の視点で、農業と林業に関しても4次総で指標を設定しているが、人口が減少していることと、農業や林業の担い手も減っていることから、1人当たりが担当する面積のようなものが増える傾向があり、自然と販売額が上昇傾向にあるのではないかと。高地栽培とか、何かこだわりがある場合は別だが、農業は自動化も進んでいるし、1人当たりの販売額は上昇に向かうのではということ、指標に見込んでいるか。例えば、積極的に農業や林業の大規模化を進め、1人当たりの販売額を戦略的・意図的に高くし活性化を目指すといった、何かしらの意図があるのかという点が、質問の2点目である。具体的には、4次総の指標で、森林整備面積を現状545ヘクタールから令和8年で700ヘクタール、令和12年で700ヘクタールという形で、一旦700ヘクタールまで増やすことを目標にし、そこからはキープする指標になっているが、どのような意図があるのか。

農業政策課

農業と林業の1人当たりの面積が増える傾向にあって、販売額が上がるのではないかと、いう点について、静岡市は急傾斜が非常に多く、面積を増やしたくても集積が図れないという状況がある。高齢化という側面も当然あるため、基盤整理や、例えば「地域の中でこの畑を守るという機運を創って集約化する」ということをしないと、なかなか面積が増えてこないという現状で、静岡市の課題にもなっている。

伊藤委員

なるほど。簡単に集約できない背景があつての指標設定であること、承知した。

中山間地振興課

農業政策課からの回答に加えて、林業については、山間地域の課題でもある担い手不足の影響もあり、集約化している。森林整備ができない方については、近隣の森林整備ができる方が集約している状況。このため、1事業体が取扱う単価は上昇してくる。手元に詳細資料を持ち合わせていないので申し訳ないが、間伐が必要な森林面積という考え方を持っていて、約10年単位で間伐をしていくが、ある程度まで間伐ができればそれを一定周期（約10年）で回していくことになる。このような背景を踏まえて数値設定をしている状況。

伊藤委員

承知した。

企画課

中山間地域に限定しない移住者数については、何人を目指すという指標を設定しているわけでないが、定住人口の目標は、これから定住人口が減少することが予想されている中で、国の統計を下回らないように設定している。

また、移住に対するコストについては、これまでもそうだが、移住に対する金銭面でのインセンティブが無くなったときに、離れてしまうのは望ましくない。市としての魅力に共感して、末永く住んでほしい。このため、金銭面で大きなインセンティブをつけて人を呼ぶことは、これまでも、これからもするつもりはない。東京の有楽町に「移住支援センター」があるが、市として唯一、静岡県とブースを並べて移住支援している。最近本市は、民間のランキング等を見ると、若者や子育て世代から人気がある都市として評価いただいている。その中には、都市部が好みの方や山間地が好みの方様々いらっしゃるの、そのような方をコーディネートし、それぞれに合った魅力を提供することで、静岡市を愛して住んでもらうようにしたいと考えている。

中山間地振興課

中山間地域への移住については、資料 17P のように様々なメニューがあり、状況に応じて増やしてきたという経緯がある。このため、委員が言うとおりの、コストが増えていることは、我々も感じている。移住者を全国で取り合っている状況にあるが、今企画課から話があったように、市に魅力を感じてきてもらうことも重要と考える一方で、先ほど舩戸委員からあったように、どのような層をターゲットにするかも重要と考えている。市の補助メニューで言えば、3親等以内には補助を出さないという制度設計になっているが、今後の観点として、何らかの関わりがあった方、すなわち、全く関わりがなかった方だけでなく、ある程度地域をわかっている方にもっと魅力を知ってもらい住んでもらう、というような視点も必要なのかなと考えている。

伊藤委員

ありがとうございます。冒頭に言ったとおり、オクシズの課題は静岡市の課題で、私的には日本の課題と感じている。例えばコンパクトシティを目指した方が、自治体効率は上がるかもしれないが、それでいいのかと。どんなまちを目指すかという大きな議論なので、悩むべき重要なテーマと思う。私からは以上です。

事務局

ありがとうございました。これでオクシズ地域の活性化に係る議事を終了します。また、これで本日の議事が全て終了しましたので、政策施策外部評価委員会を終了します。改めまして、お忙しいところありがとうございました。